もがれた翼パート26

「素数とくるみ」の上演を終えて

子どもの人権と少年法に関する特別委員会副委員長　田畑 智砂（64期）

1　子どもたちと弁護士が作るお芝居「もがれた翼」シリーズの成り立ち

子どもたちは，慈恵的な保護の対象や客体ではなく人権享有主体であることを，高らかに宣言した「子どもの権利条約」（以下「条約」という）が，国連で採択されたのは，ちょうど30年前の1989年であった。

日本が，この条約を批准したのは，その5年後の1994年であり，決して早い決断ではなかった。当委員会は，日本での条約批准の節目に，子どもの人権をめぐる様々な現実を多くの市民に伝え，条約の浸透を図るための新たな手 法を模 索した。 そして，1994年9月に，高校演劇部の協力を得て，校則違反による退学事件と児童養護施設の現実を訴える，2つの芝居を上演した（もがれた翼パート1「なぜ退学なの」，パート2「和子6歳，いじめで死んだ」）。

この活動が好評を博して，もがれた翼シリーズへと発展し，その後今日まで四半世紀にわたり，親子間や施設内での児童虐待，少年非行，学校内での退学・いじめ問題など様々なテーマを取り上げ，延べ1万人を超える市民に子どもの人権課題を伝えてきた。

そうした中，パート9「こちら，カリヨン子どもセンター」では，虐待や非行に巻き込まれ「今日，帰る家がない」という子どもたちへの支援の必要性を問いかけ，「子どもシェルター」という具体的な解決施策を提示した。この作品が多くの市民からの賛同を集めた結果，2004年には，日本で初めて，民間子どもシェルター「カリヨン子どもの家」が東京都内に誕生し，その後も，全国各地で子どもシェルターの設立が実現するなど（2019年9月現在17施設），ソーシャルアクションの原動力ともなってきた。

また，近年では，豊島区，北区，文京区，港区との共催による開催を実現し，自治体連携を強化するツールともなっている。

2　パート26『素数とくるみ』

もがれた翼の脚本は，当委員会のもがれた翼運営チームを中心に，毎年，テーマ，市民に伝えるべきポイント，登場人物・あらすじなど，喧々諤々議論し，脚本家に提示する。この過程で，必要であれば勉強会も企画する。第一稿が提示された後も，現実を描くことに拘った修正作業が続く。

2019年のもがれた翼では，子どもの権利条約採択30周年を記念し，子どもの権利条約の中でも重要な概念の一つである「子どもの意見表明権」について，その意義を正面から取り上げた。

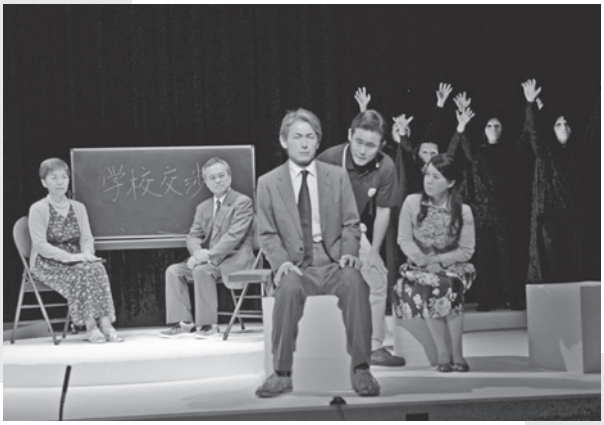
子どもの意見表明権には，多くの意義があるが，とりわけ，子どもに関わる司法判断や行政措置を講ずる際に，「子どもの最善の利益」を確保するための「手続的権利」としての位置づけがある。

「帰る家がない」「いじめにあった」など，子どもたちが直面する様々な困難について，条約は「子どもの最善の利益」を第一次的に考慮するべきとしている（第3条）。そして，何が子どもにとって最善かを検討するためには，まずは，決定に関与する大人たちが子ども自身の意見に耳を傾ける必要がある。

「素数とくるみ」では，SNSをも利用して，些細なきっかけで被害と加害がループする，学校内でのいじめを取り上げた。

今は，被害者となってしまったが，かつて加害者であった主人公の少女。そうした複雑な状況に大人たちは戸惑い，有効な言葉を持たない。

そうした中，被害少女の代理人弁護士は，少女に向けて，「いつでもお話を聴く」と繰り返し伝える。また，スクールロイヤーは，「子どもたちが意見表明する力もまだまだ成長途中です。でもそれは，手段や方法や機会が保障される中で，だんだんにできるようになってくることだろうと思います」と伝え，教



＊表紙裏にカラー写真を掲載しています。

師たちも，子どもたちの話を徹底的に聴こうと立ち上がる。

こうした取り組みの結果，いじめ加害を繰り返していた子どもたちにも生き辛さがあることや，家庭内での深刻な虐待も判明する…。

お芝居の最後に導き出された結論は，すべての聴衆を納得させるものではない。しかし，そうしたエンディングは，子どもたちに，大人の描く「解決像」を押し付けることはできないという，大人側の覚悟に伴うリアルな苦みを，私たちに体感させるものとなったのではないか。

3　当日の成功と来場者の声

本公演は，当会広報室の協力を得て新聞各紙がもがれた翼の上演を報じたおかげもあり，8月24日，25日の二日間にわたり，850人を超える市民が来場し，成功裏に収めることができた。

来場者からは，話を聴くことの大切さ，難しさに共感する声が多く聞かれ，自分は話を聴くことしかできないかもしれないけれど話を聴こうと思う等といった感想が寄せられた。子どもたちの間のいじめについて，特効薬を見いだせない現状を身にしみて感じていただいた方が多かったようで，世代や職業等を問わず，「とにかく話を聴くことがすべての基本」であることを再確認したとの感想が多かった。

また，子ども，親，教師皆悩んでいてそれぞれにサポートが必要といった感想や，一方のみを正義にしない多面的な描き方に共感する声もあり，考えさせられるラストにも好意的な感想が寄せられた。

来場者から回収したアンケートは617枚に及び，弁護士の役割や意義を含めて，脚本に込めたメッセージが確かに来場者に届いたことの手ごたえを感じるものであった。

4　最後に

もがれた翼シリーズが，四半世紀を超えて続いてきた背景には，上演を心待ちにしている多くの市民と，私たちと共にこうした市民の期待に応えようと献身してくれる市民スタッフの支えがある。

もがれた翼シリーズが，常に新しい問題を提起し，市民に愛され続けるものであるように，一層，尽力していきたい。

そして，これまで同様，多くの会員の皆様にも，この活動に温かいご支援をいただければ，幸いである。